

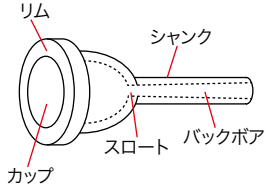
抜けるような高音でメロディを奏で、華やかに演奏を盛り上げるトランペット。金管楽器の王様とも呼ばれている。トランペットは唇を振動させて音を出す。そのため唇に触れるマウスピースは重要となる。求める音がムラなく出せるか。自分ぴったりのマウスピースをトランペット奏者は常に求めている。

トランペット奏者に寄り添う 世界に一つだけのマウスピース



演奏する曲のジャンルや、トランペットの種類によって、数多くのマウスピースが存在する

●マウスピースの構造



●マウスピースの加工方法

- 1) 真鍮の丸棒を外径28mm以下に削る
- 2) ドリルでセンターに穴をあける
- 3) 外形を旋盤で削り出す
- 4) バックボア、リム、カップの形状を削り出す
- 5) バフで磨いた後、形状の確認、調整、検査

世界のトランペッターから依頼が殺到

今から30年以上前、20世紀最高のトランペット奏者、故モーリス・アンドレが突如、ドイツ・ハンブルグのヤマハ株式会社（以下、ヤマハ）の工房の扉を叩いた。彼は評判を聞きつけて、日本人技術者にマウスピースを5個も注文した。しかも製作期間は1日しかとれないという。担当したのは亀山敏昭氏。これまで1日に5個も製作したことはなかったが、憧れのトランペッターの神様からの要望である。夜を徹して作業は行われ、翌朝には無事に納品した。

モーリス・アンドレがどんなマウスピースを使用しているかは多くのトランペッター奏者が注目するところ。ほどなくして亀山氏には著名なトランペッター奏者から依頼が殺到するようになった。ヨーロッパにはマウスピースをつくるメーカーが多数あるが、既存の製品の組み合わせで対応することが多い。一方、亀山氏は奏者の声に耳を傾け、求めるマウスピースを「から製作したり、改良を加えていく。現在、独立して浜松市に工房「Toshi's Trumpet Atelier」を構える亀山氏のものには、国内外のトランペッター奏者からつぎつぎと依頼が舞い込んでいる。

真鍮を巧みに操り、奏者の要望に寄り添う

そもそも亀山氏自身もトランペッターを演奏する。トランペッターに出会ったのは中学生の頃。吹奏楽部でトランペッターを始め、ニ・ロソの「夜空のトランペッター」に魅せられ、夢中で練習した。高校二年生の



リム部の加工の様子

時に国体のファンファーレ隊に選ばれ、この時の講師がヤマハの社員であったことから、ヤマハの吹奏楽団の入団試験を勧められた。これに合格してヤマハに入社した後、は吹奏楽団としての活動を

しながら、検品前のトランペッターを演奏して機能や音色の検査を行ったり、トランペッターの設計にも携わった。ヤマハが海外展開に力を入れ始めると、30歳の時、技術者としてドイツ・ハンブルグに派遣された。ウィーンフィルハーモニーやベルリンフィル等の奏者の意見を聞きながらトランペッターの開発を行い、多くの著名なトランペッター奏者と知り合うことになる。40歳の時、日本に帰国してトランペッター開発のチーフとなるが、50歳の時、管理職への異動を目前として、マウスピースを中心にトランペッターの仕事をしていきたいと独立。プロだけでなくアマチュア奏者のマウスピースにも対応し、仕事は軌道にのった。「マウスピースはちよつとした違いでがらりと変わる面白さがあります」と亀山氏は語る。唇が当たる「リム」の厚さや形状、息を吹き込む「カップ」の深さ、音圧が高まる「スロート」の内径などの微妙な違いで、音色も吹き心地も変わる。作り方は、真鍮の丸棒を削った後、息を通す中央の穴をドリルで開け、旋盤で外形を削り、バックボアやリム、カップ等を削って形を整え、バフで磨く。柔らかく加工しやすい真鍮だからこそ、細かい要望を形に変えていくことができる。奏者に寄り添い、真鍮を巧みに操って作り上げていく、世界に一つだけのマウスピースである。



Toshi's Trumpet Atelier
亀山 敏昭氏